石橋友也
ISHIBASHI Tomoya

1990 年生。2023 年 IAMAS 博士後期課程入学。大学では生物学を学ぶ。現代的な科学やテクノロジーの視点から、品種改良種や人工知能、文字などの自然と人為の境界に位置する対象の性質、構造、来歴に迫る実践を行う。2012 年より早稲田大学生命美学プラットフォーム “metaPhorest” に所属。現在は生物学にまつわる芸術の研究と制作を行う。主な受賞に文化庁メディア芸術祭優秀賞（2021）、第 25 回岡本太郎現代芸術賞入選（2022）など。
人類が 1700 年かけて愛玩用に造形してきた金魚を祖先であるフナの姿に戻す、都市や森のランドスケープのなかに見出される言語の幾何学的パターンを人工知能によって再認する、川で拾得した廃棄物から制作した顕微鏡を用いて川の有機的環境を覗き見る、石橋のこれらのアプローチは、わたしたち人間とそれを取り巻く環境との関係や、わたしたちが世界を生きる手段である技術について、思考を再構築するよう挑発する。
品種改良によって作られた種は自然の一部たり得るのか、人工物と自然物のあいだに本質的な差異はあるのか、〈ものを作る〉とはいかなる営為なのかを問う。

Born in 1990. Entered the IAMAS doctoral program in 2023. Studied biology at university. From the perspective of contemporary science and technology, his practices close in on the nature, structure, and history of objects located at the boundary between nature and artifice, such as improved breeding varieties, artificial intelligence, and writing. Since 2012, he has been a member of “metaPhorest,” a platform for bioaesthetics at Waseda University. Currently, he is engaged in research and production of art related to biology. Major awards include the Excellence Prize at the Japan Media Arts Festival (2021) and the 25th Taro Okamoto Award for Contemporary Art (2022).
His works include the challenge of restoring goldfish, which mankind has formed into cherished pets over the past 1,700 years, to their ancestral form of crucian carp; the idea of using artificial intelligence to recognize the geometric patterns of language found in urban and forest landscapes; and the action of using a microscope created from waste found in a river to peer into the organic environment of the river. Ishibashi's approach provokes us to restructure our relationship with our environment and the technology that allows us to live in the world. He asks whether seeds created through selective breeding can be part of nature, whether there is any essential difference between man-made and natural objects, and what kind of activity “making things” is.

i-2

Self-reference microscope

本作は川で拾いとることのできる素材で顕微鏡を自作し、その顕微鏡で川の水を覗く自己言及的な（Self-referential）プロジェクトである。素材となるのは自然物と人工的な廃棄物（ゴミ）である。こうした素材から試行錯誤を重ねて制作される顕微鏡装置が映し出すのは、現代人がその機能として享受する精緻なミクロ世界の像とは似ても似つかない「不確かな画像」である。

このプロジェクトは、現代におけるエコロジーをめぐる議論と、その背後にある技術を通した世界認識の議論の交差点に位置している。「自然」と呼んできたものが今日見直しを迫られるなか、自然哲学者のティモシー・モートンは、人為の入り混じる環境をありのままに捉える環境観として「ダーク・エコロジー」を提唱した。ポスト現象学には、技術が人間の世界の知覚や行為そのものを形作ってきたという考えがある。顕微鏡を含む光学装置は、文明の歴史において長いあいだ人類の欲望であった。ガリレオが実用的な望遠鏡を発明し、ロバート・フックが2枚のレンズを用いる複式顕微鏡を発明して以来、こうした装置はわたしたちの世界そのものを構成してきたのである。

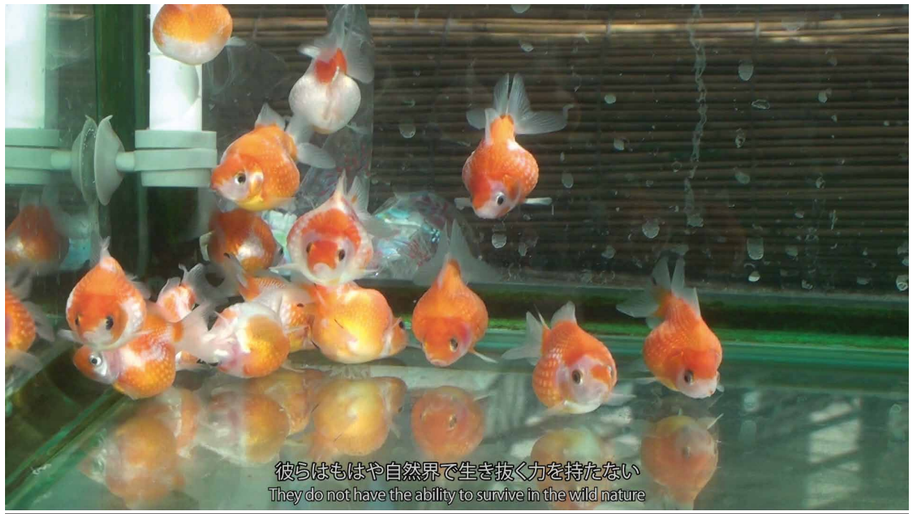
本作では、原始的な仕組みの一つである「水レンズ」や川で拾ったレンズを用いて顕微鏡を自作する作家の行為を通じて、技術と人類の関係を再考する。

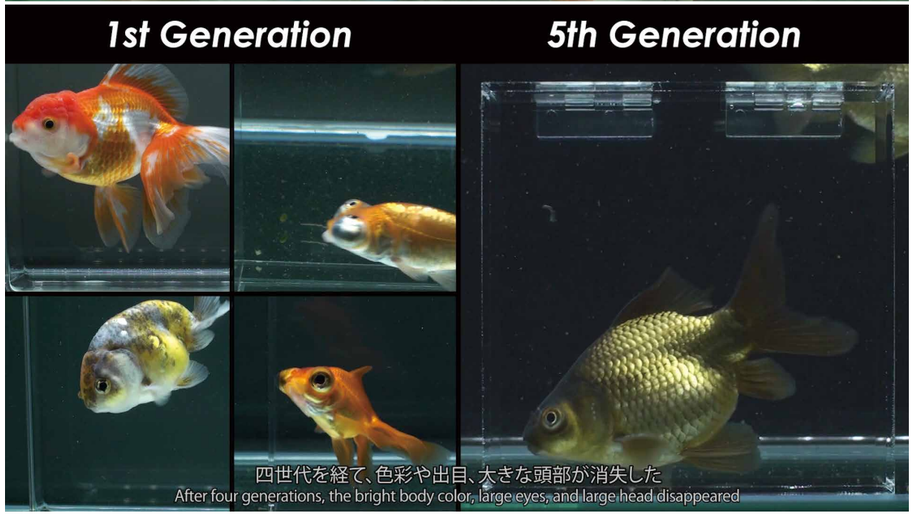
助成：令和6年度文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業

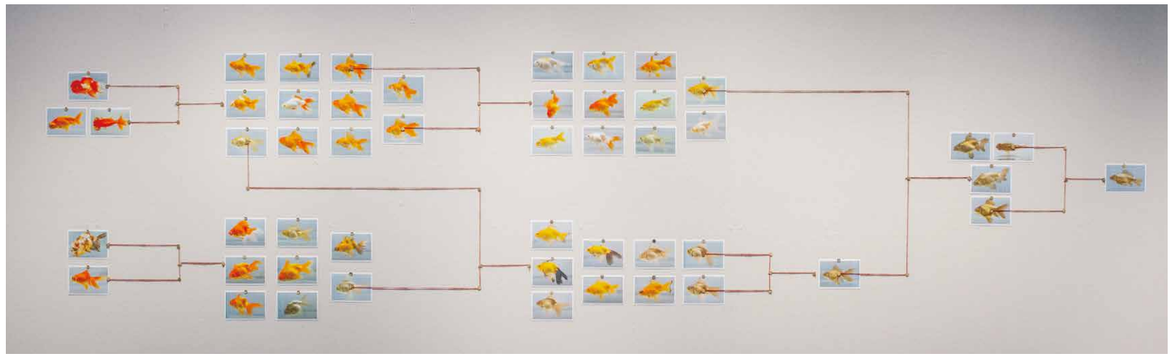
i-2

金魚解放運動

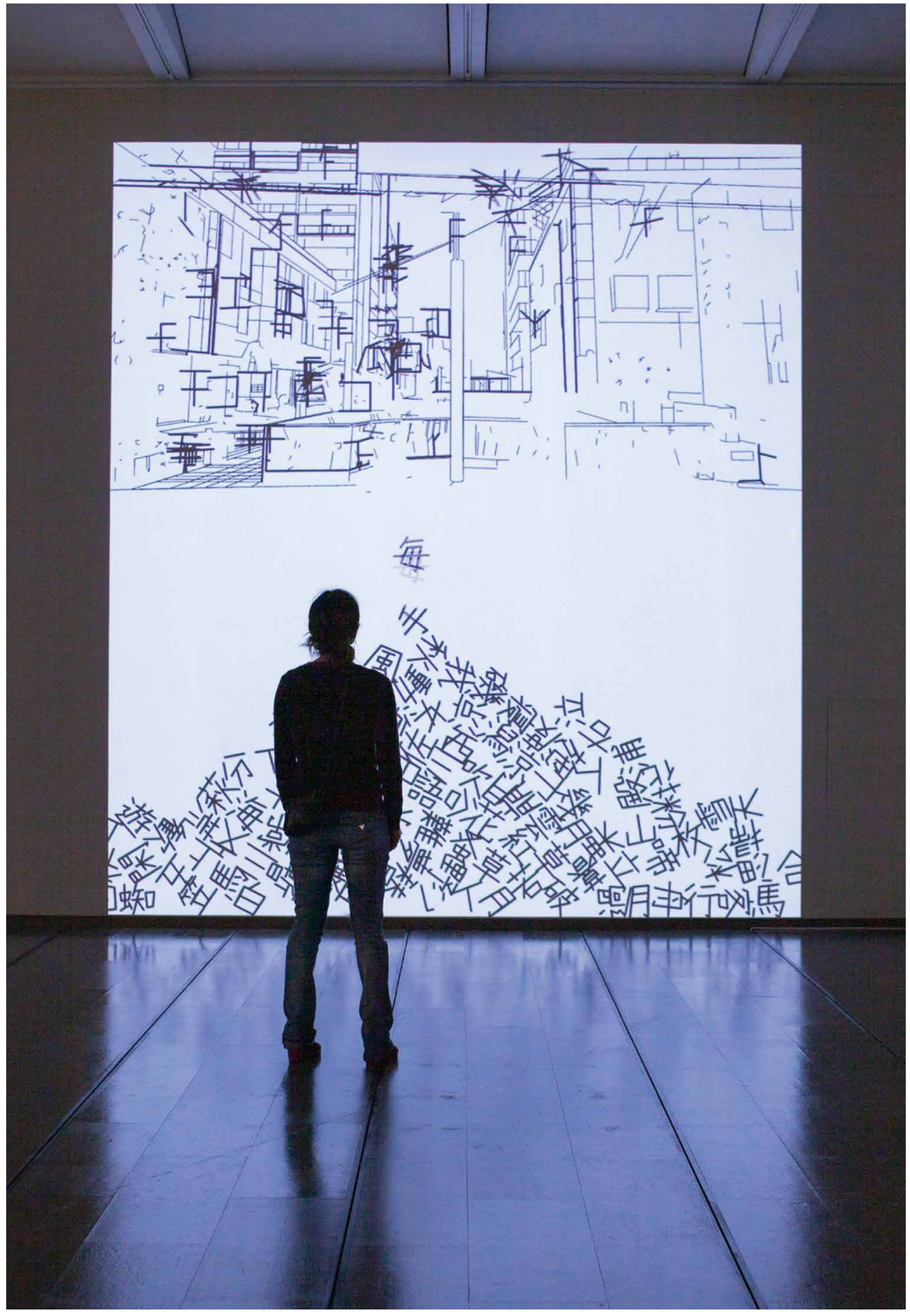
金魚の祖先は野生のフナであり、1700 年間の品種改良を通じて多種多様な品種が生み出されてきたという。鑑賞と愛玩を目的にデザインされた金魚たちは、その姿形から自然環境下で生き抜く力を持たない。本作は、金魚を逆方向に品種改良し直すことによって、祖先のフナのかたちへと戻す試みである。生命の操作にまつわる欲望や美意識、あるいは人類と他生物の相互作用や共進化についての問題を孕む本作は、先端の遺伝子組み換えを持ち出すまでもなく、人間による自然への関与を人工的とみなすのか、それとも生命の大きな流れにおける文化=耕作とみなすのかを問いかけようとする。
本作は、生物学の修士研究として行った金魚とフナの関係性に基づく研究に基づく。作品では、数世代で金魚の特徴を失ってフナの姿に戻っていく金魚の姿が簡潔にまとめられているが、その実践には5年以上の歳月が費やされている。進化とは生命の技術的な営為であり、そこに介入する人間の営為もまた進化の流れに刻まれる。人間によって歪められた生命の流れを可視化するとともに、逆方向に介入するというパフォーマンスを通じて、その業の深さを相対化している。







i-1



i-3

バベルのランドスケープ

文字言語は、思考を錬成し、社会生活を成立させ、書かれたものとしての記憶を集積し、人類の文明を根底で支えてきた。人類が発明した文字は、文明ごとに大変異なっており、それらは複雑に分岐しながら、今日の文字となってきた。
2006 年に認知科学者のチャンギージーらは、風景の中に現れる幾何学的パターンの分布とあらゆる言語の文字の中に現れるパターンの分布が一致することを示した。この研究結果は、人類が身につけた自然を観察する能力に適応するように、文字の形が収斂進化していった可能性があることを意味する。高度に発達した言語は技術的発明の最たるものであるとみなすことができるが、実はそのすべてが人類を取り巻く世界の焼き直しなのかもしれない。

florian gadenne + miki okubo

florian gadenne + miki okubo

美術家のフロリアン・ガデン（1987年生）と、美学・芸術学を研究領域とする IAMAS准教授の大久保美紀（1984年生）によるユニット。生態系の複雑性に着目し、エコロジー問題に対峙する表現活動を続ける。第 10 回 500m 美術館賞グランプリ賞（2023）、清流の国ぎふ芸術祭Art Award in the CUBE 2023 入選。ガデンは第 27 回岡本太郎現代芸術賞特別賞受賞（2024）、大久保は西枝財団 2024 年度「瑞雲庵における若手創造者支援プログラム」に採択され、展覧会「遍在、不死、メタモルフォーゼ」を企画。
ガデンと大久保は、自身を取り巻く世界との関係を新しく結び直すための糸口を模索する。非人間存在との関係を再考するブリュノ・ラトゥール、技術の人間固有性から脱却するエマヌエーレ・コッチャ、木々を見る慣習的な視点を覆すフランシス・アレを参照しながら、エコロジー問題への対峙を軸に、日常を新しく生きる芸術的アプローチを追究する。その試みは、生態系の自生に関する実験的な生物彫刻、生の関係性としての「食」をめぐる表現、生態系における複雑な関係性を多角的に再構成した絵画作品として展開されてきた。
本展では木々の世界をめぐるインスタレーションに取り組み、わたしたちと非人間存在の「生きるための技術」を思考する。

The unit consists of artist Florian Gadenne (born in 1987) and IAMAS associate professor OKUBO Miki (born in 1984), whose research field is aesthetics and art. They focus on the complexity of ecosystems and continue their expressive activities to confront ecological issues. They won the Grand Prix Prize at the 10th 500m Museum Award (2023) and were selected for the Art Award in the CUBE 2023 at the Gifu Land of Clear Waters Art Festival. Gadenne won the 27th Taro Okamoto Award for Contemporary Art Special Prize (2024). Okubo was selected for the Nishieda Foundation's 2024 “Young Curator Support Program at Zuiin-An” and organized the exhibition “Omnipresence, Immortality, Metamorphosis.”
Gadenne and Okubo search for clues to reconnect with the world around them in a new way. Bruno Latour, who rethinks the relationship with non-human existences, Emanuele Coccia, who breaks away from the human-specificity of techniques, and Francis Hallé, who subverts the conventional view of trees; are referenced whilst they pursue an artistic approach to living an everyday life anew, centered on a confrontation with ecological issues. Their attempts have been developed as experimental bio-sculptures on the autogenesis of ecosystems, expressions on “food” as a relation to life, and paintings that reconstruct the complex relationships in ecosystems from multiple perspectives. In this exhibition, they will create an installation about the world of trees and consider the “techniques for living” between us and non-human beings.

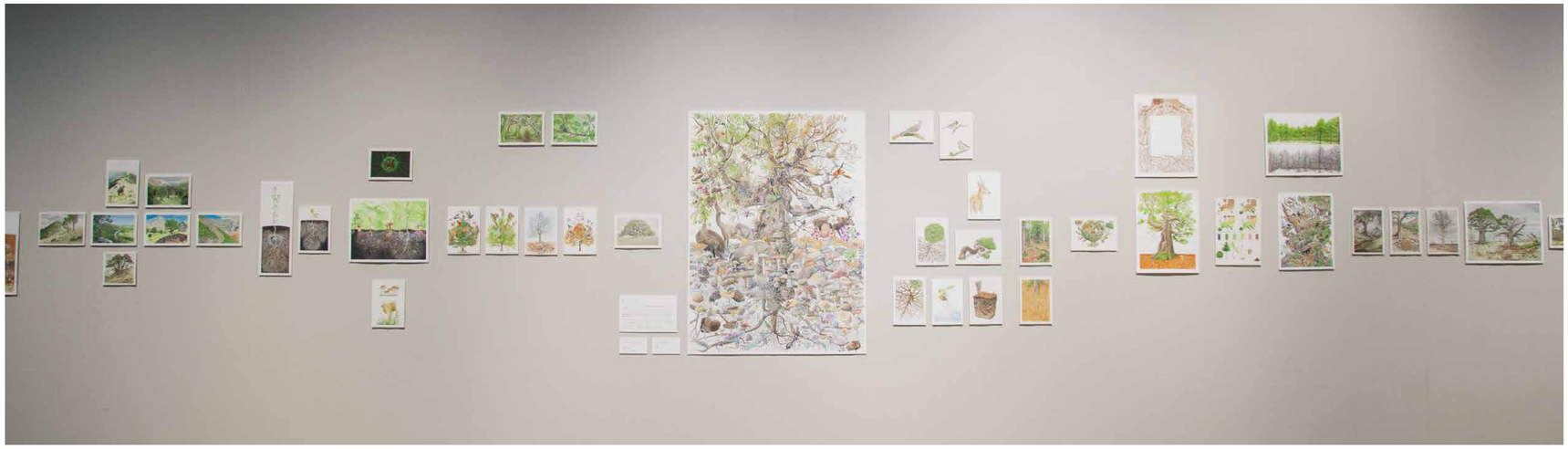
f-1

L’Arbre-Monde

《L’Arbre-Monde》は、下記の4つのパートからなり、エコロジーの問いを異なる視点から考察する。

①《Trogne–arbre habitat》
②《Le Chêne Monde》
③『L’Arbre-Monde』のためのイラストレーション
④《Gland Monde》

《Trogne–arbre habitat》と《Le Chêne Monde》は、ともに、大きな樹木を主題とした絵画作品である。樹木学者や生物学者の協力を得て精緻な調査に基づいて制作されたそれらの作品では、生態系の複雑さと多様さがテーマとなっている。こうした樹木は「ホロビオント」（=ある宿主を基軸とした多種の集合体）である。大きな樹木に共棲する多種多様な生物たちはそれぞれが樹木と関係を結んでいると同時に、樹木を分け合っているほかの生とも複雑な関係を結んでいる。
《Gland Monde》は、《Le Chêne Monde》および『L’Arbre-Monde』のためのイラストレーションに着想を得ている。ある対象を深く知ることの意味を問い、対象への共感を模索する。そしてそうした経験を共に分かち合うことを呼びかける。



f-1

f-1 ③

f-1 ③

f-1 ②

Le Chêne Monde

《Le Chêne Monde》（オークの世界）は、一本の樹木が抱え得る複雑な生態系が繊細なテクニックで描き込まれた作品である。
「オーク」［仏：chêne］はカシ・カシワ・ナラなどを含むコナラ属の総称である。フランシス・マルタンによれば、オークは樹木の中でも最も多くの種を育むそうだ。木の枝には虫や鳥や地衣類、地面には異なる動植物、根の部分には菌類が鬱蒼とする様子、さらには四季の変化すら感じ取ることができる。共生、対立、寄生、捕食・被食という生物種間の複雑な関係性とエネルギーのサイクルを可視化することによって、生とは「ネットワーク」であることを明らかにする。
2019年に始まった《Le Chêne Monde》をめぐる研究は、作品《Le Chêne Monde》（2022）の完成後もガデンとマルタンによって継続的に続けられ、『L’Arbre-Monde』（Belin, 2024）として結実した。本展では本書の挿絵として制作された64枚のドローイングも展示する。

協力：Francis Martin（フランス国立農業・食品・環境研究所［INRAE］名誉研究部長）

f-1 ①

f-1 ①

Trogne－arbre habitat

「剪定」とは、枝を切ることで人間が樹木の成長に介入することである。形を整え風通しを良くする・風害や病気から守る・果樹の生産を安定させるなど、さまざまな目的があるが、木材を得るために計画的に行われる剪定もある。人類に木材を与えるある種の樹木は、定期的に枝を切られることで幹の部分が空洞化し、驚くほど多くの種が共棲する「家」となる。動物だけでなく、樹皮には地衣類や苔植物が、根には菌類やバクテリアが無数に生息する。

ギリシャ語の $\grave{o}\lambda o\varsigma$（すべて）と $\beta\grave{\iota}o\varsigma$（生命）を語源とする「ホロビオント」は、宿主とその内部や周囲に生息する他の多くの種の集合体である。腸内細菌叢から、大きな樹木まで、こうした集合体の一形態とみなされる。あらゆる生きものの境界線は多孔質で、「個」は「他」によって成り立っている。

定期的な剪定はある種の「技術知」である。繰り返し木材を得るために、樹木の生そのものを傷つけることのないよう長い年月をかけて培われた共生の技といえる。

協力：Alexandre Boissinot（Deux-Sèvres Nature Environnementが管理するBocage des Antonins地域自然保護区の学芸員）

f-1 ④

Gland Monde

ドングリは、広くはブナ科の樹木の果実、狭くはコナラ科の樹木の果実と定義される。大きなドングリの木を描いた《Le Chêne Monde》とその木の実の多様性を浮き彫りにした『L'Arbre-Monde』のためのイラストレーションを元に制作された。拾い集めたドングリを描く盛口満の行為 *1 や、木々の構造を理解するためには見るだけではなく描かなければならないという樹木学者フランシス・アレの言葉 *2 に触発され、都市や森で採取した木の実を型取り、施釉焼成し、磁土製のドングリを得た。

ギリシャ語で模倣を意味する「ミメーシス」［ $\mu\acute{\iota}\mu\eta\sigma\iota\varsigma$］は、人間が身体動作を通じて対象を「うつす」行為であり、近代より前の時代には芸術行為の本質であった。手を動かして対象を写しとることは事物の理解や対象への共感に深い関係がある。

小さな木の実の一つひとつは樹木の生命の「技術」の現れである。植物の生のなかにある技術は、動物や人類のそれとは異なるが、みな生きるための技術を持っている。

*1 盛口満『ひろった・あつめた ぼくのドングリ図鑑』岩崎書店 (2010)

*2 Francis Hallé, Entretien avec Emanuele Coccia (2019), « Une vie à dessiner les arbres », Nous les Arbres , Fondation Cartier pour l'art contemporain.